《短　信》

服部氏のネの音調の説に同調

川　上　蓁

1　本誌199集の短信，服部匡氏「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」に，いわゆる平叙文においても終助詞ネは非上昇調が可能とある，そのお説はまさに正しい。少なくとも，大正末年生れの東京人である川上の言語については正しい。さらに，私の周囲の，東京アクセントを話す，さほど若くない人たちの言語についても正しい。人さまのお説を正しいの正しくないのと偉そうな口をきくのは甚だ不本意だが，もし誰も何も言わないでいると，逆に服部説の方が誤りであるかのように思われてしまう恐れがある。そこでやむなく口を出したのである。

2　問題の森山卓郎氏は才もあり骨もある研究者である。デビュー早々から私は氏を買っていた。ただ，氏はイントネーション攻究を専らにしてこられたお人ではなく，音調現象は多岐微妙なので，多少の聞き漏らしがあったのであろう[注]。さらに言えば，イントネーションに関わる何らかの「理論」を樹立したくなると，それになじむ音調現象のみが増幅されて聞こえてくることは，氏に限らず人間としてほとんど避けがたいことなのかも知れない。その弊の極限ともいうべきものが，服部氏が注5に取りあげられた例であろう。

3　ところで，英語のイントネーションの教本などによると，英語では文末の上昇調が日本語に比べて随分頻繁に使われるようである。例えばWhen can you come ?のような文は，末端を上げなくても質問であることは自明なのに，上げた方が丁寧だとされる。なるほど，日本語でも「いつ来られる（行ける）？」の末拍を上げなかったら，しかも文頭と文末のピッチ差が大きかったら，その発話は高圧的に響くであろう。しかし，もし「いつおいでになれます？」だったら末拍を上げなくても失礼ではない。文末上昇調が強制されるケースは日本語（少なくとも東京語）には随分少ないのではないだろうか。

問題のネについては，それが森山氏の言われるように聞き手の反応を要求するものであるなら，そのネを加えた平叙文に，さらに，聞き手の反応を伺うイントネーションだと氏が言われるところの文末上昇調を与えることは，質問の文にさらに文末上昇調を与えるのと同様のことで，（調和の美学によるものとは言えても）必要なこととは言えないであろう。

4　もっとも，上昇調が論理的に必要か否かに関わりなく，上昇調を用いる方が調和も良く対人的にも安全だと認め，それぞれのケースで上昇調を選択する人が圧倒的に多くなれば，表面の状況は，文末上昇調強制のもろもろのケースが存在するのと同様のものになってしまう。そして，今日の日本語はかなりその状況に近くなっているように感じら

れる。

森山氏のお説は，恐らくその新日本語の外面にかなりよく対応するものなのだろう。今後氏がそのイントネーション論を深めて行かれるに当たり，上昇調にせよ非上昇調にせよ，それぞれのケースにおいて，それが強制されるのか，あるいは単に選択されるのかの区別（その区別は実例数の多寡とは別次元のことがら）に厳密であることを私は期待する。

5　現実に，イントネーション選択の自由は意外に大きいもので，例えば「あした来てくれるね。」においてさえ，ネを上げない選択が可能である。それは，聞き手のご都合など伺う必要はないと思っている人の言い方としてである。聞き手を，自分の要望を拒絶することなど到底できない弱い立場の人間だと見ている人の言い方である。無礼千万なイントネーションかも知れないが，そのイントネーションを日本語として誤りだと決めつけることは私にはできない。言語行動というものは，概して，定食ではなくアラカルトで料理をとるようなものではないだろうか？

注　アクセント調査などに深く関わっている研究者でも，助詞などの小部分に注意を集中すると，そこが高まっていないのに高まっていると聞きとってしまうことがある。一方，アクセントやイントネーションの研究の実験台にされた人が真に自然なイントネーションで発音することは，老練な役者などは別として，まずまず有り得ないことである。大方は要らざる所で声を高めてしまう。

参考文献

服部　匡氏　「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」『国語学』199，平成11，1999年12月

森山卓郎氏　「モダリティとイントネーション」『言語』6月号，平成11，1999年6月

森山卓郎氏　「文の意味とイントネーション」『講座　日本語と日本語教育』第1巻，明治書院，平成元，1989年9月

川上　蓁　「文末などの上昇調について」（特に第3節）『国語研究』16，國學院大學国語研究会，昭和38，1963年8月。川上蓁『日本語アクセント論集』汲古書院，平成7，1995年3月，に収録，補記訂正。

——國學院大學名誉教授——

（2000年7月17日　受理）